

教育と「距離」

原 野 利 彦

Education & Distance

Toshihiko HARANO

1. 「問題解決」的学習過程で合理性が付加され得るという迷妄

教育過程は、経験した事柄を再編成して学習させる性格を強く持っている。当初は曖昧だった物事を、学習させるためにあらためて取り上げ、吟味し、合理化するというプロセスである。それはよく考え抜かれ、合理化された「話し合い」の「場の設定」などによって、或る内容を個々人に定着させるプロセスである。その場合、初めの事態の曖昧さは克服され、より大きな生命力を付加させると考えられがちである。しかしこれはひとつの錯覚ではなからうか。むしろ事態の初めには存在したダイナミクスを、後の作業を加えることによって平板化し、紋切り型へと変形する冒流を加えることになりかねないのではないか。

「話し合い」などの場や方法を考案した当初は、深い洞察をしたつもりだったのだろう。そしてそれに多くの意義を背負わせた。しかし、それは単なる大衆的愚昧化を進める作業にすぎないのではないか。なぜならば、そこでは伝達可能な内容しか残らないからである。教師にしろ子供たちにせよ、自分達の技術や技能で可能なやり方に翻案するからである。そこに合理主義が入ってくるのだが、ロジックにならない部分、他人が分からない部分は排除されるのである。確かに生じた当初は曖昧ではあったが生命力のあった物事が、合理主義的に平板化されてしまうのである。

個々の子供が、或る発想を得たときには、それが価値のあるものであるか否かを勘づいていることは少ないだろう。しかし、いわゆる個々の「子供の願い」などが、クローズアップされ、教育の場で取り上げられる時の方が、より正確なものになると考えるのは我々の偏見であろう。当初の生き生きしたリズムを削り落として、どうしてより正確になると言い得るだろうか。

《現代の子供達が社会変化に翻弄されて、きわめて表層的な適応しか出来ないとき、学校教育は彼らに時空間に深く位置付き、深く時空間を生きる力を育てることを目指すことができる》という前提は、それこそ吟味すべきではなからうか。学校で生きる力を育てることを追求することが一見教育的に見えて実は閉塞させることの緻密化であるかもしれないのだ。それは「教育的」慣習の網の目の中の役割への固定的呪縛ともなりうる。それは「改革」を無前提的に是認するイノベーション型慣習への呪縛である。

我々が日常生活で寄りかかっている感覚を見てみよう。例えば、人気のあるテレビ番組はそれを端的に示してくれる。その番組とは次のような特徴を持つ。それは極めて無害で

小さな物語を描いており、大衆が生きているコードを確認させるから人気がある。つまり現状維持の役割を果たす。だが実際は幸福のイメージを振り撒いているだけであるから「出来事」は起こらない。だから極めて政治的なものだと言える。

或る調査によれば、小学5年生のテレビ視聴時間は、学校教育の時間と同じ900時間だという。ここで作られている暗黙の感覚に支えられた学校教育における「高まり」「向上」という方向づけは知的であり心身の発達に役立つというドグマは批判されねばならない。

現代の最高のドグマは、「偉大さ」に対して、もはや恐怖を抱く必要がないということである。我々は野蛮の恐ろしさや神々という「迷信」にもとづく偉大な力に畏怖を感じる必要がないというわけだ。我々は十分に科学化され文明化され、多くの保障の方法を知っているという。だから何らかの大災害が起こっても、科学的に解決されるであろうし、またたとえそれが可能でなくても、それ以外に頼る方法がないとされている。だから個人が自分を鍛えるなどということは、何の意味もなさず、むしろ「学問的に」考案された様々の「保障」に支えられて生き延びる方が賢明だと思い込んでいる。そのために個々の問題に対しては、それにふさわしい専門分野があり、それぞれの解答様式があるという。この楽天主義によって、我々はあらゆる脅威にそなえようとしている。

例えば学習のための問題設定の場面構成ということを検討の場としてみよう。これは音声や身振り、文書によって、またはもっと強力なメディアによって構成される。注目すべき点は、ここでは次のことが前提されていることである。つまりそこには一つの連続的な、同質のエレメント（境位）が成立しており、そのエレメントが侵害されるのはすべて偶有的なことであるという前提である。

つまり問題設定の局面というものは、問題として設定すべき内容があること、これを思いつく想念が設定に先立っていること、その設定の仕方、伝達の方法についてはしかるべき準備がなされていることなどが前提されている。諸混乱を同質の固まりにし、事態を把握しやすいように縮減する行為として問題設定があるのである。

次にこの設定された記号群は、アナロジーを通じて未だ存在しない仮説を構成する記号群を呼び起こし、やがて推論という働きを通じて検証に至るというように考えられている。ここでは問題定立という局面、仮説という局面、検証という局面は、それぞれ別々の局面と見做されているが、それらの間にはなんらかの連続性・同質性があり、したがってルールもあるはずだとされている。つまり、それらは論理関係などとして跡付けをし直す操作が可能だとされている。（フィードバック、振り返り）このように時空間を科学的に操作可能な等質的な場として形成したり、「個性化」、「自己実現」の場として形成するプロセスをもって、教育的とする考えの根底には閉塞型の遠近法が厳然として横たわっているのである。

ここには各局面を区別している違いdifference（裂け目、ズレ）に対する軽視がある。各局面は相互に反復が可能だという前提に潜んでいる「距離」「差異」というものは、殆ど考慮されていない。だから「問題解決」はこのたとえ多視点型の主張をしてみても、やはり一元的・閉塞型の遠近法に還元されてしまう思考法であるということになる。各局面を区別している違いdifferenceに対する軽視は、刻々の場面において剰余を産み出さないため、その集積としての形而上的時空を「外」に産み出さない。つまり「高さ」の感覚を不可能にする。

この種の思考法は、垂直の空間感情に影響する。偉大な幸福と惨めな幸福との差を極端に縮める。丁度、科学が太陽系を小さな物にし、月を至近距離において我々から原初的な距離感覚を奪ったように。つまり空間感情を根とする想像力を卑小なものにしたように。

つまり、我々の想像力には重層性がなくなっているのだ。そして想像力の所産にすぎぬ「現実」に一元化されているのだ。「現実」とは何か？—それは我々の利害に関して服従を要求してくるものであるのか。否、それは「現実」であるという理由だけで我々に服従を要求する権威である。

教師は、この「現実」の意識に至るところに持ち込み、その現実の細部を絶えず案出し「具体化」する者である。しかも、最も困難な状況においてもこの現実に従うことを要求する者である。したがって、この「現実」に添わない者は、危険な人物だと考えられ、また逸脱者自身も、良心の疚しさを感じざるを得ないのである。

教師は、自分の案出する「現実」が恣意的なものではないように見せかけるためには、それを絶えず科学的「因果関係」に置き換え、無数の空想的な「因果関係」を破壊しようとする。だからこそ、「現実」という名の想像の世界も、益々その想像性を貧弱にしていくのである。そして更にそれは「現実性」を増していく。

しかし、これは本当に「現実性」を強化しているのであろうか。我々はこの因果関係を「新たに」考察し、確証するために、その原因と結果の関係を裏づける「実例」を次々に付け加えていく。そこには証明、強化、表現、反論があるだろう。だが貧弱な「現実」の増加という貧弱な想像力の世界があるだけである。

2. 「現実」の強制力と克己

「現実」とは何か……それは如何なる社会慣習であれ（つまり現代のように「変革」を美德とする慣習であれ）、慣習に対して成員が服従することを要求するものである。そして「悪い」ということは、慣習的な思考からは予測がつかない状態を言う。本当に自由になろうとする人間はすべての点で自分に依存し、慣習に依存しないことを望むから「非現実的」であり、「自分勝手」であり、「悪い」のである。「現実」とは何か……それは、我々にとって利益になるものをもたらずから従わねばならぬもののように見えるが、実は、「現実」であるという理由で我々が服従する権威である。

「現実」は、恐怖によって服従を命じるが、その恐怖とは、「現実」を作ったり、説明したりする高度の知性があるはずだという思い込みによる理解し得ない不明瞭な力に対する恐怖である。これに反する者は「弱者」、**「異常者」**とされる。

「現実」的な視点からは「問題解決」の中に潜むパラドクスを見る自由は、悪と見做されるであろう。このパラドクスとは、「問題解決」の各局面が反復すると同時に他者性を持つということである。事実、「問題解決」の過程とされている各局面は他の局面とのコミュニケーションの地平を絶たれ、解釈や意味づけの地平から絶たれ、多義性という概念とは区別され、文脈という概念から切り離された地点に立つことが出来る。各局面は文脈との何らかの断絶する力を含んでいるのである。

今や実験・治療過程の思考理論の中核的位置を占めている「問題解決」理論はこのような疑問を予め排除されて形成されて出来ている。それどころか、このような疑問を予め排除する方向に教育し、学ばせ、治療するのである。

これが「知性的」であることの典型であることが求められる学校教育の中心的方法である。この場合知性的であるということは、彼らが「体験」する時空間を越えて、抽象的次元での「連続性」を生きることを意味する。たとえばJ.Deweyは学校には3つの機能（単純化され、順序づけられ、均衡のとれた環境の提供）があると言う。これが教育化されたSituationsの組織化としての学校というものである。

3. 残酷さによって不安・陰鬱を放棄する。

大量生産型システムが主流を占める学校教育の重圧下で、絶えず不安にさらされている時、我々は同情を求める弱者となるか、断固として残酷な人間になることによって不安を投げ棄てようとする。後者の場合、どんな嫌なことでも、場合によっては恐ろしい課題も進んで引き受け、不安感に耐え刻苦勉励した人によってもたらされる「残酷の享楽」がある。力に溢れ、復讐心が強く、邪推深い者がもちうる「残酷の享楽」である。集団は残酷な者の行為で元気を養うのである。「隠れた次元」「隠れたCurriculum」というような学校教育の深層で、このことは厳然としてある。自分に鞭打ち、自分に徹底して残酷になれる者、「自己に厳しい者」が称揚される。こうして残酷さ、苦痛は信頼を得、快樂は疑いを持って見られる。

残酷な者は、力の感情の最高の快感を享楽する。絶えざる苦悩、辛い生き方のもとで難行苦行することを美德とする。近代においても辛い労働は美德として称揚され学校教育ではそれが子供たちに強要された。絶えず不安にさらされている時、我々は同情を求める弱者となるか、断固として残酷な人間になることによって不安を投げ棄てようとする以外の選択肢はないので、「同情」は強者と弱者を仲介する重要な観念となる。やがて同情されることは、自分を弱者たらしめる危険として感じられることなく受け入れられるようになり、したがって同情されることは侮辱としては受け取られなくなる。まして惨めさの元凶としての労働（学習）も侮辱として感じられることはない。

労働（学習）の成果がうまく手にはいかないときは、計画—実行の不手際としてその状況を捉え、もしくは自分の能力がないと言い、その課題は自分達より優れた者のみが実行し得るのだとして、その課題から逃避し楽になろうとする。大量生産システムの重圧下では、無力と恐怖の感情は、独特の形を取って非常に強く、絶えず刺激されるので、それに釣り合うだけの独特の力の感情を必要とする。この力の感情が近代の人間の特徴を作り出す。この感情を獲得するために近代「文明」という手段が発見された。

大量生産システムは多様な工程や製品を生み出すが、これらの多様性を概括する力を我々に与えない。日常生活においては状況を単に粗野な有用性のレベルにおいてのみ経験するように仕向ける。時空間を規定する場合も、このシステムを成立せしめる大衆的レベルでのみ定義される。この定義・ルール以外では迅速性に欠けるし、疲れるのだ。つまり紋切り型が直接経験を圧倒するのである。自ら観察したことが与えられた既成のシェーマに当て嵌められ、両者の不整合は無視されうやむやにされる。かくして世界は単純化され、そのために事態の複雑さに対応できなくなり、ますます迷宮化していく。Curriculumとは知性による世界の組織化である、というテーゼが一般図式への還元・単純化と同義になる。だからカリキュラムで育てられた「知性」では方向づけが出来なくなる。近代教育のCurriculumは子供の知性を空洞化する。

4. 自己内化された大衆的価値観の克服

それでは如何にして自己内化された大衆的価値観を、自覚的に越えることができるのか。「情報化社会」と称される状況において、我々は情報の収集・処理いかんが、事態の趨勢を決すると信じている。しかしながら、事態は殆どいつでもうまくいかない。かくていつも「良い情報を集める」という行為自体が疑われることなく、その行為自体の正しさが証明されるような状態がいつも生じる。これを飼い慣らしの巧妙化として捉えることができる。表面的には状況が刻々と変わり、恒常的なランドマークを不可能にされている。この表面的な多様性は、情報への飢えを絶えずもたらす。しかし「良い情報を集める」という行為自体が疑われることがないとき、我々は大衆化され、等質化される。我々は深層における一様性の中に幽閉される。境界線は流動化し、視覚に頼ろうにも等質化されてしまった景観に取り囲まれてしまう。白けきった見慣れた風景がどこまでもついてまわる。区別し求心化するためのシンボルも衰退し、すべてが、記号化され抽象化されてしまう。この事態に心身共に服従する者は、益々現代人らしく醜くなる。つまり美しくなる。つまり人間らしくなる。

現代の世界は記号システムになっている。都市や家々、人々は「～時代風」のイメージを表面に貼り付けられ、由緒ありげに見せ掛けられている。しかもこれが「文化」という意味を与えられている。すべては注意をひく程度には差異（記号）がつけられているが、強烈な存在としての毒気は抜かれてしまい、行儀良く並列化されている。すべては学校やオフィスの机上での「問題解決の思考」が可能であるように、解決しうる問題（情報）に還元されねばならなくなる。解決不能の問題（情報化できない問題）は排除される。

ここでは人々はIdentityを確保することは困難である。その表層的システムは人々の前にはあるが、人々とは無関係にある。しかも「自分を～風に見よ」という押し付けがましいシステムの中に亡霊のごとく、生きた屍のように住まわざるを得ない。夢の作業としての圧縮などに類する比喩的思考も昼間の延長としてしか機能し得ず、夜の睡眠も昼の延長となる。真の不眠だけが頼りとなる。不眠でなければ夢見ることが出来ない（ブランショ）。

人々は曖昧なところが一つもない、オープンで深みのない機能的思考のみが育てられる世界に生き、「情動的」理性によって一元的に還元された集団や社会の中で生きることが安全だと思う。そこで同類となり、自己の品位を下げ、自分の美德を無視するようになる。ここでは人々は方向感覚を失わざるを得ない。つまりシンボルの縮減によって己の位置づけが出来なくなる。

我々は機能的によそよそしく定義仕直された世界に住まわざるを得なくなっている。親近感と信頼をもてない世界の中で自己を形成せざるを得ない。しかしこの世界を馴染み深い焦点や枠組みをもつものとして信じようとする。できるだけ明白で単純化されている世界として仮構したい。だからこそ「情報」として機能的に定義仕直された世界に住もうとする。住むとは馴染み深い世界に行為し憩うことだ。こうして加害者から逃げおおせ、獲物にありつく機会を得たいと思うのだ。確かにこの保証されることが好きな群れに対して、その「要求」、「願い」を叶えようとする身振りで自己の存在理由を得ようとする官僚的消費社会は心地良さと効率的で安全な生活をもたらす幻影をつくることは出来る。これが人々の要求を「自らの課題として受け止め」、「問題解決」のプロセスに変換するということだ。だが、それは深い場所への関わりを阻害し、世界的な規模で平均化しようとする

プロセスにあらゆる地域、個人を巻き込んでしまうことなのである。

人はこの世界に生きるため、自らをいわゆる保護色という環境の色に適応させる。そしてそれを「人間主義」だ、とか「時代の流れ」だ、「改革」だということによって普遍性を僭称させる。我々が幸福であり、今の自分の状態に感謝すべきであり、自分が「実力」をもち、熱愛する振りをする。「基本的には安全に対する感覚である」（ニーチェ「曙光」1-26）偽の感情に自分が安住していることを自他に（特に自分自身に）知られまいとして、本当の情熱の勧めを不信の念で聞き、いつも自分を監視している。特定の者に対しては闘いを決然として断念し、自分の手に負えそうな相手に接近し、そこに平和と契約を見出し、安住しようとする。それが「正しい（正義）」ことであり、「賢明」であり、「節制」であり、「勇気」であるというわけだ。この範囲内において「向上」し「高尚」になるために競うのである。

ポストモダンといわれるような、かつての産業社会的な正統的整序能力（慣習）の形成を越えて、変転目まぐるしく困惑させる状況の連続の中で、行き当たりばったり「情報」を「ハント」しながら生きるプロセスを「問題解決」と名づけ、あたかもそこにIdentityがあり、正当な分節がなされているという幻想をもたせる。「問題解決」、「情報」の名によって偶然を必然に換え、一貫性の偽装する。このような犠牲を払って人間の「向上」を図る諸概念が生じる。

5. 気分をつくれ！——情報化時代の場の重層化（カリキュラム形成力）

興味・関心……喜んで行為することを決断する原因はなにか。それは「気分」である。現代の「神託」である。何を「神の意志」として読み取るか。自分の心を奮い立たせ、同時に安全に獲物にありつく気分である。この複雑な世界の縮図を入手し把握する方法を手に入れたと思いつく現代の「神託」である。そのためのシンボリック思考（キーワード、キャッチフレーズ）が様々に考案される。深層を機能させる思考が重視される。

かつての多くの国々が固有の暦を持ち、近代の主権国家が領土を持っているように、自己は己の活動の場の配置としての時空間を持つように仕向けられる。場の形成は自己形成の強力な拠り所（もしくは自己形成の強力な顕在化）として位置づけられる。自己のIdentityの形成を考察するには多様な様々なレベルをもつ場への着目し、そこで自分の「願い」、「隠れた欲求」を顕在化するように強いられる。子供の願いを顕在化する場の形成、課題の取り上げ方の伝授が教育学となる。「場を作ることが、自分の世界の秩序付けである」というわけだ。

例えば「国際化」、「情報化」という気分作り……広い視野を持ち、多様な領域を操作するには、それに相応しい強力な主体の形成が必要であろう。国家や国家間の政治・経済組織に見るように、その主体形成の理念や組織方法の如何によって領域の広さや領域維持の強度が図られるだろう。この領域は重層的に交錯する。（ちょうど多国籍企業が領域国家を越えるように。）……このような気分の醸成が学校教育、「生涯教育」で図られる。この大衆社会では表層的、一時的記号の戯れによって自己形成が可能だとされる。しかし定着感のない浮遊感は人々を不安にする。「情報」を入手して、人は物事を身たり聞いたりしていると思っているが、概括的な記号以外のものを見たり聞いたりしているにすぎないのだ。「情報」を追うジャーナリスティックな気分、つまり、やじ馬気分が優勢になる。

自分自身の時空間と言いくるめられても、所詮それは代替可能なものとして時空間でしかない。人々は自分の場、世界、眼差しを自分自身で作るのではなく、「専門家」によって与えられる代替物であることを強いられることを当然と思い込む。この関係の維持、つまり、歴史や由緒があるものだと専門家によって保証されてはいるが、それも適宜に交換可能な粉い物キッチュの歴史（レトロ気分）が人々の生活を取り囲むことになる。それは均質で不毛な記号や物体にすぎないのに。

このような気分では、人々は「専門的な」テクニクの用語以外の言葉では思考が出来なくなる（マニュアル人間）。そればかりでなく、それが唯一の言葉であると信じこむに至る。そして偶然性を支配するために科学的研究とそれを強力に推し進める「公正で、暮らしを良くする」諸システムを熱望するに至る。新たなシステムを志向する「強い人間」は、「感傷的態度」を蔑視して、代替案を模索するというわけだ。いずれにしても技術主義的態度は感傷的な抗議の声の構造まで浸透していき、「冷静で正しいシステムを要求する抗議者」のタイプを生み出すのである。

人は博物館化した感性（気分）からの離脱するように求められる。かつての博物館化した感性（気分）とは、「場」を無視し、モノを中心に配列・展示し、それを本来の時空間として提示し、そこで歴史意識（時間意識）や空間意識をつくろうとする教育機関の気分であった。今やこのような気分を脱し、モノに支配されない心の時代が待たれる。それには、あらゆる場がリズムの多様さと Identity と指針を与える場になり、表層的な文化の権威に服従している慣習からの離脱が図られるような場になることが促される。

諸課題や目的は硬直した設計図や抽象的概念からではなく、「人々の願い」という具体的に意義深い経験から導きだされねばならないとされる。それは具体的要素の操作のための単なる変数として扱ったり、固定した視点しか形成しない場の克服だとされる。しかし「情報化」とはまさに具体的要素を操作のための単なる変数として扱ったり、固定した視点しか形成しない場の形成にほかならない。愛着のある場所、光や音や感触のある特定の場所の経験からインスピレーションを引き出す場所とは、まさにこのような「操作のための場」なのだ。ここに「新しい」教育目的概念が作られる。意義深い場所に結び付きたいという要求の満足を目指すことが重視される。それは人間的な地理学（「地球に易しい」時空間のモデル）を取り戻すプロセスつまり Curriculum として登場する（「新しい学力観」）。

6. 機械仕掛けの俳優

近代的学校の時間空間は工場型である。この工場型に規格化された教育の時空間は碁盤目状の時間割や座席表によって代表される。近代学校はこの時空間をいわば「地」（隠れたカリキュラム）として、「図」としての教育内容（顕在的カリキュラム）を可能にしてきた。その教育的行為は機械仕掛けの時計の針の如く進む単線型のリズムであり、そのリズムへの子供の馴致であった。多様なリズムは複線型のリズムという形態をとられ、大量生産システムという優勢なリズムへ一元的に還元できるように秩序づけられてきた。つまりこのシステムが優勢な社会では、多様なリズムで興味関心を集め、それを一元的な原理に吸収・還元されてきたのである。

ここで求められる振舞いは、時計仕掛けの人形のように「自らを形成する」ことである。

つまり、物理的に時を正確に刻み、座席という名の与えられた数10センチ四方の空間に長時間じっとしておくという能力である。このような行動のパターンを他人に見せて一人前だと認めてもらおうとする俳優であり、何よりもまず自分自身にロボット化した自分を見せて「自信」をつけ、プライドのあるIdentityを作り上げようとした。学校で、工場で、オフィスで、地域で人々は、この時計仕掛けの正確さと、居場所の固定を担保として、互いに期待しあい、信頼しあい、契約してきた。「真面目な人間」という役割をこなすための練習をつんで、互いに真面目さを見せびらかし合った。これが表面上の様々な行動内容の相違を越えて、「隠れた次元」として近代人の役割と舞台をなしていたのである。

ここでは、他者に優越する力量をもつための努力が美徳とされ、「向上心」とか「発展」、「成長」、「発達」などと名づけられた。優越者の残酷な快感を味わい、劣る者は、その眼差しのもとで悲しみや、嫉妬や、無力観や、没落観を味わった。優越するための苦しみの復讐心は、劣る者の苦しむ姿を見てなだめられた。

この残酷さの快感は教育における近代的習慣（絶えざる発展＝習慣の絶えざる再構成＝イノベーション）を踏襲する「向上心」を追求する「善意」だけで得られる。「偽りの善行」の役者たちが大量に生産される。

この残酷さへの効き目が弱まるとき、近代的遠近法を越えようとする知性を育てる試みが始まる。たとえば自由をその本質とする子供の遊びや場の設定が子供を生き生きさせ、深い解放感をもたらすと言うわけだ。だが、教育においては、「子供の願いを教育課程化する」ことは、いつもイノベーション物語に子供の成育を当て嵌めていくことを前提にしている。問いの形は技術主義的傾向への誘導から逃れることができない。

7. 距離感の育成

社会に思いがけない災難、天候不順や地震、治療方法が見つからない恐ろしい伝染病がふりかかる時、人々は何か社会のシステムを改革しなければならないのではないかという考慮と行動に取りつかれる。これは殆ど条件反射的な「改革」志向という習慣・慣習である。このように「改革」に向うことによって自分達の心や想像上の神々をなだめようとするのである。これは「迷信」的な考慮と行動ではなからうか。これは世界を「邪推」することではなからうか。

しかも我々はこの考慮と行動に第2第3の意義を挟み込む。こうして我々は感覚と快感を損なうまでに《原因－結果》を何か意味ありげな象徴によって支えねばならぬと思う。こうして「問題解決」というプロセスを神の代替品として崇高化する。子供のすべての好奇心、暗示、整理（秩序づけ）の感情は、この「問題解決」の要素に翻訳され、このプロセスに還元される。行為の事後に語られるとき、この「問題解決」という説明図式は力を発する。子供はこれを猿のように模倣し、素直に受け入れることが作法に叶っていることだと思う。効用性によって存在の必然性が理解できるという近代の偏見が問題解決の崇高化を支える。「課題」意識は高い位置をもち、運や不運で判断することは目的意識や課題意識の希薄さの証拠だとされる。

「問題解決」という儀式では物事を理解できないのではないかという不安は、更に専門分野を広げたり、深めたり、統合したりするという身振りを特権化した。そして専門化は難解さを増加させたばかりでなく、難解さへの魅力さえ生まれた。「問題解決」は実践的

な装いをもつために多くの実践的な人間に理論に裏打ちされた実践の唯一のあり方のように信じ込ませることが出来るようになった。そのために人々は自ら「問題解決」の苦勞を買って出るのである。

教師は「問題解決」の儀式の司祭として学校内で権力を振るい、弱いが同時に恐ろしい者として公には迷信的な尊敬をもたれている。この思考法にあてはまらない直観（つまり実験困難な直感）から疎遠になること、実験できる経験にのみ信頼をおく傾向が強くなればなるほど「向上」したと見做すこと、この「問題解決」のプロセスと戯れることが「高級なもの」と思い込むこと、それに適合できるように程よく非感覺的になれること、ここで育まれる想像力、予想、批判、材料の収集が普遍的な思考様式であると思い込むこと……これらが究極的な教育目的とされた。

仮に、ルーマンに従って「意味」を直接的に体験に現われるものと同時に他の体験可能なものを統合する体験処理の形式と捉えてみよう。そうするとその都度示されている瞬間瞬間の事象は絶えずひっきりなしに、他の物事を指示していることが意識化できるように見える。なぜならば、今の体験の内容は、そうでない他のものを常に指示しているように見えるからである。だがこのように意味を「体験の秩序」であり、「体験処理の形式」であると捉えてみても、近代的遠近法は越えられまい。なぜならば、それは実体化され孤立化させられた「主体」が所有するため等質化した地平に囲い込むことだからである。これは「問題解決」の儀式を排除しないどころか、むしろ強化するのである。確かにルーマンは意味概念は第1次的なものであり、自己意識とは独立して取り扱えるものであるという。つまり意味は主観概念に準拠せずに規定することができるものだという。これは自我ではなくエスの働きを重視するなどの操作で補強することが出来るように見える。

しかしこの遠近法は、多元化による一点集中の理性中心主義の限界の乗り越えに見せかけて、「絶対の不在」、「天の喪失」などの難問を巧みにくぐり抜け、しかも「向上」を可能にするという身振りにすぎない。これは垂直の距離を持たない「地上的な」課題や目的というプロセスの起源に注目し、これを洞察すればするほど、物事の核心に迫れると前提することにおいては一元的な理性中心主義となんら異ならない。

しかもこれが「絶対の不在」、「天の喪失」などとして表現され、裂目深淵を覗いた気分をアリバイとしてもたらすだけ陰險な解決法である。これは自らを犠牲にして努力することの意味が分からなくなり、不安になることを「現実」主義のニヒリズムという基調によって悪魔払いしようとすることに他ならない。恐ろしさにすくむかわりに深淵を見た振りをして実際は見ないようにするだけのことである。

カフカのごとく半睡状態で瑣末なことに対して観察を重ねること、まどろみのなかで記憶と想像の混じり合いをさせること……ここではかつての模写論のように世界の複雑性と意識の複雑性とが対称的であると考えすることはできない。たとえばヘーゲルやフィヒテのように意識を反省過程とすることは、境界がすでに知られている場合のみ可能なのである。しかし意識とは外部世界に対して非対称的なのである。

だが、我々は境界を設定する石のように硬い不滅の概念に躓くだろう。そしてこの躓きの概念を破壊するよりも、むしろその概念を使う「問題解決」という儀式によって足を折り、押し潰されるであろう。なぜならば、目的・課題からのトートロジカルな追求こそ物事の本質に迫れるという前提は不滅の力を持つからである。

「自覚」を高める（「向上」）は、いかに多元性を装おうともトートロジカルに反省的思考を展開する主体というものから脱出できない。「汝自身を知れば学問の全体である…あらゆる物の認識の終りになってはじめて、人間は自己自身を認識したことになるであろう。なぜなら、物は人間の認識の限界にすぎないからである」というニーチェの言葉（曙光1-48）を想起すべきであろう。

我々は猿から進化したという。起源を聖なるものと見做せないとき、我々は未来を架構して「向上」しようとする。だが「人類にとって高級な秩序への通路は決してない。丁度、蟻やはさみむしが、その‘人生航路’の最後に、神との親類関係や永遠にまで高まることがないように。」……「問題解決」は如何なる「距離」を我々にもたらずであろうか。